

「7つの習慣」の考えを応用した初年次教育

Application of the 7 habits of highly effective people idea to the first year experience education

横井健二*

Kenji Yokoi

Summary

In recent years, we faculty of the product design course are encountering an issue of the first-year students. The issue is that the first-year students do not have enough fundamental posture for leading a daily life and we notice the fact that the issue comes from the lack of autonomy.

In order to improve their autonomy, we have started a trial measure to which the idea of “THE 7 HABITS OF HIGHLY EFFECTIVE PEOPLE” was applied during the first semester in 2013. “THE 7 HABITS OF HIGHLY EFFECTIVE PEOPLE” was proposed by Dr. Stephen Richards Covey in 1989, and this idea have been applied to company worker training or young generation education in many countries.

We have gotten a certain good feedback from the trial and in this article we report the outline of this year activity and its result.

キーワード : 7つの習慣、初年次教育、ドロップアウト、社会人基礎力

Keywords : the 7 habits of highly effective people, first year experience, dropout, fundamental competencies for working persons

1. はじめに

大学での学びのスタイルは、高校時代とは大きく異なり自主的な学びの姿勢が必要となる。しかし、その学び方の変化についていけない学生が増えてきている。このことへの対応として、レポートの書き方や資料や情報の収集方法などの具体的な勉強方法を教える初年次教育の必要性が昨今言われてきている。

本学においても教養部の教員によるファースト・イヤー・セミナー、そして専門課程の教員による専門動機づけ科目が実施されている。前者はより基礎的な学びの手法の習得を狙いとしている。一方、後者は専門分野を学ぶに際して、その分野自身がどのようなもの

なのか、そしてその分野での勉強方法はどのようにしていくのかなどを習得させて、自主的な学びのスキルを養っていく狙いの科目である。

このような初年時教育をプロダクトデザイン専攻（以降、PD専攻と記す）においても実施してきており、相応の効果を発揮してきた。しかし、何人かの学生に対しては、そういったスキルや知識以前の問題もあるとの認識を私達PD専攻の教員達は持ち始めていた。そういった問題以前とは、日々の生活を送るための基本的な姿勢、言い換えると主体的な行動への姿勢が取れないことである。例えば受け身的に漫然と日々の生活を送るのではなく、主体的に自分の意志に基づいた行動をとる。あるいは、学生という立場でおこなうべき

*情報学部 情報デザイン学科 プロダクトデザイン専攻

当然のことを継続的に全うしていくことなどが主体的な行動に分類されるものである。また対人との接し方においても、自分勝手に自分視点での行動をとるのではなく、対する相手の気持ちや相手の利害を考えた行動の工夫をとることなどがこの問題以前と呼ぶ分類に入る課題である。

昨今のPD専攻の新生生を見ていると、このような問題につまずいて、相談する友人もできないままに孤立し、学校に来る意志も持てなくなり、最終的には一年生を終える前に退学に至る例もみられるようになっていく。

このような問題認識から筆者等PD専攻の教員が着目したのが「7つの習慣（ななつのしゅうかん）」という考え方である。この「7つの習慣」とは、米国の作家で経営コンサルタントであったスティーブン・R・コヴィー氏が1989年に出版した同名書物¹⁾にまとめられた成功者となるための7つの要因のことである。7つの習慣の考え方はこの本が出版されたのちには、企業活動を活性化させるための人材教育のプログラムなどとして大きく取り上げられるようになっていく。この本が発表されて数十年が経つが、その考え方の応用は全世界的に広まっている。またこの考え方を若年層の高校生や中学生向けの教育プログラムにアレンジしたものは「7つの習慣J（ななつのしゅうかんじえー）」と称されるものとして、世界各国の多くの学校機関にて採用され、日本においても活用する学校機関は多い。

PD専攻において、2013年度前期にこの7つの習慣を一年生前期の専門動機づけ科目である情報デザイン入門セミナーなどのカリキュラムに取り入れた施策をおこなった。この施策に意図したのは学生に対して主体的な行動によって生活を送ることの重要性を理解、体得させることであった。その本当の意味での最終結果は一年生の後期を終えたころにしかみることができないが、前期の授業を終えた時点で学生に対して実施したアンケート結果や教員自身が得ている感触などからは、良い効果が得られたと認識している。本稿ではそ

の実施内容と実施した結果を紹介する。以下本稿では実施内容をプログラムと記述する。

2. 学生能力の捉え方

日々授業中で学生と接している中で感じている学生の能力面における課題として、大きな改善が必要であると判断した項目が次ページに示す①～④の4点である。具体的な問題例は後述するが、この4項目は、経済産業省の提唱する社会人基礎力²⁾としている3つの能力とその12の要素にも挙げられており、その内容を参考にPD専攻の学生の普段の行動から改善の優先順位が高いと思われる要素を選定したものである。

社会人基礎力についてここで多少説明を加えておくと、この力は、「図-1. 社会（企業）で求められている力²⁾」に示されているように基礎学力や仕事をおこなっていくために必要な専門知識を上手く活用する力と定義されている[図-1. 社会（企業）で求められている力]。これらを支えているのが、「人間性、基本的な生活習慣」で、具体的には「思いやり」「公共心」「倫理観」「基礎的なマナー」「身の回りのことを自分でしっかりとやる」といった事項である。

社会人基礎力は、「図-2. 社会人基礎力の3つの能力/12の能力要素²⁾」に示されているように、大きく3分類され、それぞれの能力がさらに12の要素に細分化されている[図-2. 社会人基礎力の3つの能力/12の能力要素²⁾]

同省が企業の採用担当者と採用される側の学生との意識の差をアンケート調査（平成21年度就職支援体制調査事業『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』³⁾）の分析結果には興味深い事項をみることができる。企業の採用担当者が重視し、学生に足りないと感じているのが、「粘り強さ」「チームワーク力」「主体性」「コミュニケーション力」といった人間の内的な能力要素であり、社会人基礎力に他ならない。この反面、学生側は、「ビジネスマナー」「語学力」「業界の専門知識」「PCスキ

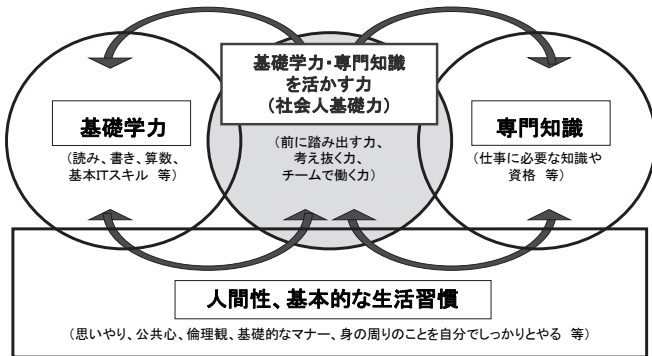


図-1. 社会（企業）で求められている力²⁾

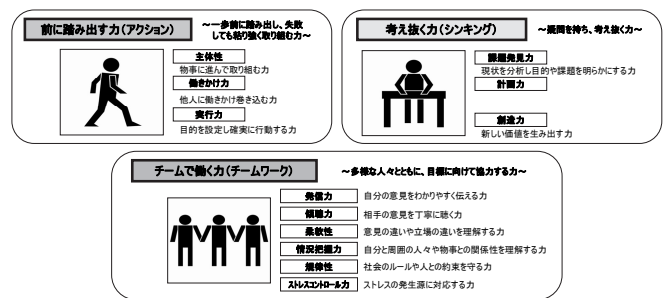


図-2. 社会人基礎力の3つの能力/12の能力要素²⁾

ル」といった基礎学力や専門知識に分類される知識やスキルの力が不足していると認識している。この辺は人生経験の短い学生が学ぶことが、すなわち知識やスキルといったものを習得することと捉えているのが要因と考えられる。それに対して企業の採用担当者は長期視点で労働に携わっていく観点から、仕事への姿勢や仕事の仕方といった労働の前提となる社会人基礎力を重視していることがこの結果となった要因と考えられる。4項目の能力名の後に〔 〕括弧で記載した力は3つの能力分類であり、③、④の2件が同じ分類に入る要素である。

<学生能力の課題>

- ①主体性〔前に踏み出す力（アクション）〕
- ②計画力〔考え抜く力（シンキング）〕
- ③状況把握力〔チームで働く力（チームワーク）〕
- ④規律性〔 〃 〕

以下、PD専攻の学生の行動として散見される問題を要素ごとに記述する。

まず、①の主体性であるが、この要素の原義的な意味合いは、自らの判断で主体的に物事に取り組む力、姿勢といった内容である。しかしながら、より初歩的な面での行動についてもこの主体性に関連している問題が存在しているように感じている。例えば、本来は経済産業省の社会人基礎力の定義でいえば「人間性、基本的な生活習慣」に類するような、朝に大学の授業に間に合う時刻に起床し、朝食を摂って家を出て通学し、大学の教室まで出向く。こういった日常の当たり前ともいえる行動さえも、この主体性に関わる問題として発生していると感じている。というのは、この一連の生活習慣にあたる行為ができるかできないかの判断からいえば、学生たちには当然能力的にはできる筈の事柄である。しかし、学生は起床して通学時刻に間に合うように行動をおこすか、はたまた眠気や面倒臭さに耐えて意思決定としてその行動を起こさないことを自分の意志として選択しており、主体性の問題といえる。同様に、授業中にはしっかりと教師の話聞きノートを取る。宿題や課題を期日までに終了させて提出するといった行動もこの主体性に関わる能力要素と捉えられる。

授業中の居眠りにしても、居眠りをしている学生に「昨夜は何時に就寝したか」を尋ねると、午前2時や3時といった回答が返ってくるが多い。その理由を聞いて驚かされるのは、ゲームやLINE、Twitterなどをしてきたとの理由である。そういった遅い時刻まで起きていることで、次の日にどのような結果になるかは、

分かっている筈ではあるが、目先の楽しさといったものにとらわれて、翌日に起こり得る居眠りを考えていない行動をとっている。

また主体性の無さからくる一番の問題は、なぜ自分が大学で、そしてPD専攻で学ぶかについて、自分なりに明確な動機づけを持っていないことである。17～8歳といった年齢で明確な職業観を持って学ぶべき専門分野選びができていないかという問題についてはさまざまな意見や考えがあるので、ここではその点を議論はしない。それ以前の問題として何のために大学に通うのかの自覚のレベルの課題として捉える。色々迷った末にPD専攻という専門分野を学ぶクラスに入学した現状を踏まえた上で、何のために日々大学に来ているかを自分として主体的に判断できない行動が取られている。具体的な例としては、特にしっかりとした意欲も見出せずに、大学に籍を置いたまま授業から遠ざかってしまう。面談などの場で話をしてみると、継続して大学に残って勉強する、今後は授業にも出ると回答をするが、その後にも一向に行動を変えようとはしない。結果として、そのまま退学になる事例が発生している。

次に計画力である。この力とはある事柄を実行するにあたり、その実行に際しての手順を把握し、与えられた時間、期間の中で必要となる行動を手順に沿って実行していく力である。学生の場合には大きなプロジェクトの中での仕事を任されるようなことは少なく、計画力発揮の範囲は限られている。多くの場合は課題の提出や宿題の提出をいかに切り盛りするかが、第一の問題となる。宿題ができておらず提出できない状況でよく学生が発する言い訳は、半分はやったのですが、完成していないというのがある。こういった言い訳をするのは、全く忘れてしまったと回答すると、恥ずかしなどの気持ちから、少しでも手を付けて進めていることを言い訳にしたいと考えてとった行動である。しかし、計画性の無さ、自分なりの時間の管理がしっかりとできていないことは自覚しつつも、何ら改善をしようとならない状況を示すものといえる。

次に状況把握力である。これは、自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力である。同年代のクラスメートやクラブの友人などと、どのような関係を築き、日々の付き合いの中で上手い交際や、やり取りをしていけるかに加え、年長者あるいは年少者といった自分とは年代が違う他者に対してどのように付き合っていくならよいかを判断し、実行する能力である。近年は核家族化、あるいは地域コミュニティの希薄化によって他者との接触機会が減ってきてしまい、この能力の低下が起きているといわれる。

その問題から発している現象がある。一年生の新学

期の初めての授業に学生たちに簡単に自己紹介をさせる機会を設けている。その時に彼らの口から発せられる言葉に「僕は〇〇に興味を持っています。もし、〇〇に興味を持っている人がいたら、気軽に声を掛けてください」というフレーズがある。お互いに自己紹介をして趣味だとか、興味のある事柄を披露しておきながら、自分から声を掛けるのではなく、他者から声を掛けて貰うことを待っている姿勢を象徴するフレーズである。自分から能動的に友人に話し掛けることをしようとはしない。このような姿勢の例として、授業を欠席してもその授業の内容や出た宿題を友人に確認することはせずに、1週間後に先週は欠席したので知りませんでしたと、あたかもそれが当然の権利のように述べる学生が多い。このような行動も状況把握力に起因する問題点である。

最後の能力要素が、規律性である。社会のルールや人との約束を守る力である。集団生活を送っていく上でこの能力要素は無くしてはならない要素である。

具体的に起こっている問題は、間もなく成人になるかと思う年齢の学生にしてはあまりにも幼い行動としかいえないものも多い。例えば、教員にメール連絡する際に、メールの常識を守らないことに重ねて差出人が誰かも書かずに送ってしまう。また、実習室に自らが飲んだペットボトルを飲み残しが入ったまま机の上に置いて帰宅してしまう行動や、教室に入室し出席を取っている間にもスナック菓子を食べるのを止めようとしないうちの行動をとってしまう。もちろん実習室や教室では飲食は原則禁止であることは第一のルールであることは別にしても、このような社会の初歩的なルールというものが身につけていないことに驚かされる。

以上、4つの能力要素について、PD専攻の学生の行動から気がついた問題点を述べてきた。念のために他の能力要素を取り上げずに、この4つの改善が重要と捉えている理由を補足しておく。他の8つの能力要素については、さらに行動のもたらす結果のレベルを上げていくために習得すべきものと位置づけられるとの認識がその理由である。

3. 「7つの習慣」の授業での実施内容

前章では、PD専攻にて大学での勉学生活を継続していくために不可欠な4つの能力要素について述べた。この能力要素の改善のために、なぜ「7つの習慣」を学ぶことが有効であると判断したのかの理由と実施事項を本章では述べる。

3.1 「7つの習慣」の概要

「7つの習慣」とは、「第1章 はじめに」で簡単にその内容を述べたが、スティーブン・R・コヴィー氏が同名書にて成功者になるための要因をまとめたものである。その本の冒頭にその要因を導き出した過程が説明されている。その内容を要約すると、アメリカの建国の1776年からこの書籍をまとめていた当時の1989年までの200年間にアメリカで出版された成功に関わる文献をすべて調べた結果の「成功の鍵」とでも呼べるものを整理して得られたものと記されている。さらにもう一步詳細な内容を述べると、建国から150年間の文献には、その成功の裏付けとなる行動の規範となる原理原則に基づいた行動をとっており、「人格主義」と呼べるものがあつたと記述されていたとのことである。一方、その後の近年の50年間では、対照的に人との接し方のテクニックや自分自身のイメージのつくり方といった表層的な手法について言及しているものばかりだったそうである。氏はこれを「個性主義」と名付けたが、「7つの習慣」は前者の原理原則に従って行動する際にとっていた「人格主義」に分類される成功の鍵がより重要であるとしてまとめられている。

授業の教科書としては、スティーブン・R・コヴィー氏の元々の著作は社会人向けであつて難解だと考え、氏の子息のショーン・コヴィー氏が10代向けにまとめた「7つの習慣 ティーンズ」⁴⁾を選定した。授業で学ばせるために補助的な教材についても、基本的にはこの「7つの習慣 ティーンズ」(以降、「ティーンズ」と記す)の説明の仕方や内容に従って作成した。

7つの習慣の個々の内容については次頁以降に説明していくが、位置づけは習慣を身につけていく段階的な手順に従って、「私的な成功」「公的な成功」「リニューアール【絶えず鍛え、備える】」という3段階にわたって実施するものと説明がなされている。

この3段階個々の説明を筆者が作成した学生用説明資料記載の文章をそのまま本稿でも用いさせていただく。『 』内が説明資料で筆者が記述した説明である。

「私的な成功」とは、『他人のせいにしてたり、他人に依存したりせずに、自らの強い意志によって、自己責任で行動できていれば、文字通り自立した人間だと言えます。

このように人間として自立できていることは、個人の間人視点から見ると、大きな成功だといえます。「7つの習慣」では、個人的に自立できていることを「私的な成功」と呼んでいます。

そして、第1の習慣から第3の習慣までを、自立するまでの習慣、すなわち「私的な成功」に至るための習慣と捉えています』である。

一方、「公的な成功」とは、『家庭でも、学校のクラスでも、クラブや委員会の活動などにおいても、メンバーの人たちと協力し、相乗効果を発揮することで、自分だけでは為しえなかった大きな成果を生み出すことが、そのグループとしてのゴールであり、成功といえます。

このような成功のことを、「7つの習慣」では、「公的な成功」と呼んでいます。この「公的な成功」を獲得するための習慣が、第4の習慣から第6の習慣です』である。

そして、3番目の「リニューアル〔絶えず鍛え、備える〕」には、「第7の習慣」が入れられており、絶えず第1の習慣から、第6までの習慣がより高いレベルで実践できるように見直し、自らを研ぎ澄ましていく行動が規定されている。以下に7つの習慣の第1の習慣から第7の習慣までの具体的な項目を3段階に分けて示す。

<7つの習慣>

I. 私的な成功

第1の習慣：主体的に行動する

第2の習慣：目的を持って始める

第3の習慣：一番大切なことを優先する

II. 公的な成功

第4の習慣：Win-Winの考え方

第5の習慣：まず相手を理解してから、次に自分が理解される

第6の習慣：協力から生まれる相乗効果

III. リニューアル〔絶えず鍛え、備える〕

第7の習慣：自分を磨こう

7つの習慣のそれぞれについてその内容の持つ意味を説明しておく。「第1の習慣：主体性を発揮する」は、他人依存の受け身的な行動姿勢では良い結果は得られない。絶えず自分の考えによって、主体的な行動をおこなう習慣を身につけることの重要性を説明している。

「ティーンズ」にて、この主体的な行動の重要性の説明の際に強調されているのは、主体的な行動とは反対の行動のもたらすマイナス面である。反対の行動とは、「反応的な行動」と同書では呼んでいるが、自らが受けた出来事や刺激、被った問題点に対して、論理的、倫理的、ビジョン的な判断をせずに、瞬間的、感情的に反応し行動することとしている。そして、そういった行動がもたらす結果は一般的には物事を悪い方向に至らせることになってしまう。一番の問題点は反応的

	緊急	緊急ではない
重要	第1領域	第2領域
重要ではない	第3領域	第4領域

図-3. 時間管理マトリックス

な行動をとる当事者自身が行動の結果について、責任を負う準備や心構えができていないために、生じた悪い結果を修復することも難しいとこのことが述べられている。

次に、「第2の習慣：目的を持って始める」は、自らの行動の目的となる「ミッションステートメント」をまず作成する。そして、このミッションステートメントに記載した目的達成のためには日々のさまざまな行動をどのようにしていくかの原理原則を決めていくことが説明されている。ミッションというと元々は宗教的な意味合いを持ち、欧米人には理解しやすいが、日本人にとっては分かり難い概念かも知れない。授業では「ティーンズ」での説明を用いて「あなたの人生を表す、人生の青写真」と解説した。また、作成の際の注意事項としては、就きたい職業やその職業での目標といった内容を記載するのではなく、日々の生活の中で守っていく指針や、取るべき行動などの当面やっつけようと思うことをまとめるのがコツと説明をした。

「第3の習慣：一番大切なことを優先する」は、この7つの習慣の中で一番重要な習慣である。この時間管理の考え方は、図-3 に示すような4分割されたマトリックスで個々の学生が日常にとってのさまざまな行動を分類して、その優先度を考えさせるものである[図-3. 時間管理マトリックス]。

横軸には緊急の度合い、縦軸には重要性を設定する。そして個々の行動項目をこのマトリックスの中に記載していくと、普段の生活の中で、緊急だが重要ではないことに多くの時間を使ってしまっていることが視覚的に理解できる。本来であれば、緊急ではないが、重

要である自分の長期的な目標達成のための事柄にしっかりと時間を配分しなければならないことが如実に分かってくる。

以上の第3の習慣までが私的な成功を獲得できる自立を確立する過程である。そして、次の第4の習慣から、公的な成功を獲得するための習慣となる。

「第4の習慣：Win-Winの考え方」は、物事は相手があるものではあるが、その相手との接し方について、勝つか負けるかといった二者択一の解決方法しかないとは捉えない習慣を根づけるものである。双方が得になる「Win-Win」の解決方法も取り得るものあり、その解決方法の方が何倍も良い結果をもたらすことを目指して行動する習慣のことである。

「第5の習慣：まず相手を理解してから、次に自分が理解される」は、自分が相手に理解されたいと思うならば、まず相手の言っていることを理解するように努力する。そうすれば、相手側も自分のことを理解してもらったのだから、相手の言うこともしっかりと理解してあげようという気持ちになることを示すものである。これは学生能力の問題としてあげた③の状況把握力と密接に関係する習慣である。

「第6の習慣：協力から生まれる相乗効果」は、人間はとかく自分のことを正当化してしまい、相手が悪い、あるいはおかしいなどとしがちである。しかし、相手の持つ特性や考え方を上手く生かして、相乗効果を図っていくことを狙う習慣である。

さて、最後の「第7の習慣：自分を磨こう」は、良い習慣を継続的に実践し、絶えず向上させていくためには、身体的、知性的、感情的、そして精神的に自らを高めていくことを実行する習慣である。「ティーンズ」では、身体的な面では、定期的に運動をする、バランスの良い、そして安全な食材の食事を摂るなどがその手法と記載されている。知性的な面では、本を読む、得意分野を見つけ深めるなどが提唱されている。感情面では人間関係を良好に保ち良いと思うことをしたら貯金ができたと考える「人間関係信頼残高」なる手法が紹介されている。この貯金の考えは自らにも当てはめて、自分との約束を守る、また小さな親切をしたら「自己信頼残高」が増えるといった考え方も紹介されている。また、ちょっとした秘訣として、嫌なことが起きても、笑うことで良い感情的な循環を得る手法も紹介されている。そして最後に精神的な面では、自然と触れ合う、音楽聞く、また楽器を演奏するなどの魂の栄養といった比喻でおこなうべき手法が紹介されている。

3.2 「7つの習慣」活用の意義

前節では、「7つの習慣」の概要を述べたが、この考え方を活用することの意義をこの節では説明する。

第2章においてPD専攻の学生の能力要素の課題について述べたが、これらの要素の改善はしっかりと身についた能力として培われていかななくてはならない。高校卒業までに培われて来なかった能力を今になって身につけるとなると、学生が個人としてその事実を自覚すると伴にその問題がもたらすマイナス点をしっかりと理解するなど、強い動機づけが必要である。

この「7つの習慣」の考え方の良い点は、気づきが階層化されており、単に主体的な行動をなささいといった指導ではなく、一つひとつの習慣の習得に際し、その意義や考えていかななくてはならない道筋が細かく説明されていることである。また、「ティーンズ」は著者である、ショーン・コヴィー氏が元々の「7つの習慣」の提唱者である父親の下で成長する過程で実際に経験した事例もふんだんに盛り込まれており、当事者目線で書かれていることが大きな利点である。また、さまざまな研修などに使われている歴史も長く、関連するテキストやワークブックなども多く、ただ座学で学ぶだけでなく、それぞれの学生が自分の経験や立場から活用する教材が作り易いことにも大きな利点がある。

次章で実施内容について紹介していくが、授業で進めるにあたっては、筆者なりに「7つの習慣」をPD専攻の学生を対象として全29ページからなるワークシートを作成して使用した。そして、このワークシートを記入したものは基本的には教員に提出をさせて、それぞれにコメントを記述し、学生の考えを褒めたうえでさらに高い目標を目指すような動機づけを図った。

4. 「7つの習慣」実施内容

4.1 実施日程、実施授業枠

「7つの習慣」の実施は、表-1の記載にあるスケジュールを計画し、実行した[表-1. 「7つの習慣」実施日程]。利用した授業や機会の枠は3種類で、一番中心としたのは専門動機づけ科目の「情報デザイン入門セミナー」である。次に、利用したのは「デザイン概論」という科目である。これは筆者が担当する授業であるが、月曜日の2限で、実質的には新たな一週間の最初の授業であることを利用し、学びのリズム作りに活用した。また、3番目に利用したのは、本年初めて企画され実行に移された1泊2日の新入生オリエンテーション合宿である。以下、その実施内容を説明する。

情報入門セミナーは「7つの習慣」を実施する上で

表-1. 「7つの習慣」実施日程

授業回数	月日	実施授業名	所要時間 目安(分)	実施内容
1	4/8	デザイン概論	5	「7つの習慣」の紹介
2	4/9	情報デザイン 入門セミナー	10	「7つの習慣」の実施意義と概要の説明
3	4/15	デザイン概論	15	「7つの習慣」を学ぶ意義補足説明 悪習慣[1-4]宿題
4	4/22	デザイン概論	15	悪習慣のディスカッション、パラダイム[1-5]宿題
5	4/23	情報デザイン 入門セミナー	45	プログラムの全体概要説明 パラダイム[判断基準、物の捉え方]の理解と 好ましいパラダイムを持つことの説明
6	5/6	デザイン概論	15	パラダイムについて復習
7	5/7	情報デザイン 入門セミナー	45	第1の習慣「主体的に行動する」
8	5/13	デザイン概論	15	第1の習慣「主体的に行動する」復習1
9	5/20	デザイン概論	15	第1の習慣「主体的に行動する」復習2
10	5/21	情報デザイン 入門セミナー	45	第2の習慣「目的を持って始める」 ミッションステートメント作り
11	5/27	デザイン概論	15	第2の習慣「目的を持って始める」復習1
12	6/10	デザイン概論	15	第2の習慣「目的を持って始める」復習2
13	6/17	デザイン概論	15	第2の習慣「目的を持って始める」復習3
14	6/22-23	新入生オリエン テーション合宿	1泊2日	第3の習慣「一番大切なことを優先する」、 第4の習慣「Win-Winの考え方」
15	6/24	デザイン概論	15	第3の習慣「一番大切なことを優先する」復習
16	7/1	デザイン概論	15	第4の習慣「Win-Winの考え方」 時間管理のマトリクス復習、プランナーの使用
17	7/8	デザイン概論	15	第4の習慣「Win-Winの考え方」復習
18	7/9	情報デザイン 入門セミナー	45	第5つの習慣「まず相手を理解してから次に 自分が理解される」、第6の習慣「協力から生まれる 相乗効果」、第7の習慣「自分を磨こう」
19	7/15	デザイン概論	15	第5～7の習慣全体復習1
20	7/22	デザイン概論	15	第5～7の習慣全体復習2
21	7/23	情報デザイン 入門セミナー	15	各研究室ごとに「情報デザイン入門」の授業と 「7つの習慣」の総括

の中核の授業枠として活用し、今後デザインを学ぶ上での動機づけのカリキュラムと上手く組み合わせた内容として実施した。15回の授業回数のうちに合計で6回を使い、そのうちの4回に90分授業のほぼ半分の45分間を利用した。45分として、90分を2分割した理由は、このようなやや抽象的な内容の学習を90分間に連続して詰め込んでしまうと、高校を出たばかりの一年生にとっては精神的な負担が大きいと考える判断である。授業実施後の筆者らの教員の実感としては、学生の集中力、興味が継続する時間の範囲内で短時間にスピード感を持たせた授業の推進によって、「7つの習慣」の学びと専門動機づけの内容が相乗効果を生んで学ばせることができたと考えている。

情報デザイン入門セミナーの枠では「7つの習慣」理解の導入部を比較的時間を掛けて、説明と学生自身が自ら考えてワークシートに記入する演習的な時間を多くとって進めた。私的な成功でのキーとなるのは、まず「主体的な行動」の重要性の理解と、自らの行動の目的の大原則となる「ミッションステートメント」

2-6 第2の習慣: 目的を持って始める

T1-P.116

ミッションステートメントを作ろう

またまた、英単語の登場です。ミッション[mission]とは、【使命、任務、役目】、あるいは、【天職、(一生の)使命】といった意味です。ステートメント[statement]とは、【(文書・口頭による)陳述、声明】という意味で、ミッションステートメントとして合成した用語の意味は、「自分の役割を簡単に文章にしたもの」ってことになります。

「7つの習慣」でのミッションステートメントは、自分が何を大事にして、どのような目標に向かって行くのかをまとめたものです。それを文章として残すことで、その内容に従って日々の生活の様々な出来事に対して力強く立ち向かって行くことに役立ちます。

「T1」のP.116を見てください。そこには、「あなたの人生を表す、人生の青写真とも言えます」と書いてあります。さて、あなたも自分の青写真作りにチャレンジしてみてください。悩むより、一度書いて見直した方がより自分に相応しいになります。「T1」の事例を読んで、下記の枠内にまずは、第1バージョンを書いてみましょう。

ミッションステートメント

僕は個性を大事にして、何ごとにも縛られることなく自分の意志を貫き通したい。
また、自分誰しもにも優しく自分に、この損得を考えないで行動できるようにになりたい。

学籍番号 _____
氏名 _____

図-4. ミッションステートメント
〔学生作成事例〕

の作成である。

主体的な行動の重要性の理解については、反応的な行動をしてしまった経験を思い出させて、その時にもし主体的な行動が取られていたら結果がどう変わったかを事前の宿題としてワークシートに記載させた。授業時間では、その記載内容を数名の学生に発表させ、他の学生にどうしてこうなったのか、あなたらなどのようにするかといった質問をしながら反応的な行動のもたらすマイナス面と反対に主体性を持った行動のもたらすプラス面を実感させた。

次に「ミッションステートメント」の作成であるが、自分なりの行動原則をどのように作るかを考えていると、学生だけでなくどのような人間にとっても決めるのは大変な事柄である。そこを乗り越えさせるために、「ティーンズ」に掲載されているミッションステートメントの記述例などを紹介した後に、作成自身は宿題として少し時間を空けて書いてくるように指示する配慮をした。その結果、各自バラバラではあるが、個人ごとにバラエティーに富んだ良いミッションステートメントを作成していた。意外であったのは身近なところにお手本になるような大人が居て、その人の考え方

のあるところを見本にして頑張っていきたいというのが少なからずあったことである。図-4.はその一例であるが自分の父親をお手本にした事例である。父親は誰とでも優しく接し、損得を考えないで付き合っており、その点を見習いたいと記述していた。身近なところにお手本になるような人が居ること、そしてそういった面をしっかりと見ている点は素晴らしいと感動してしまった[図-4. ミッションステートメント〔学生作成事例〕]。

次に、「デザイン概論」での実施の仕方であるが、この授業の冒頭の約15分を、ほぼ毎週にわたって「7つの習慣」関係の学びに利用した。先週の復習であったり、次に学ぶ項目を予め宿題として提示し、考えておくようにと簡単な予習的な説明にあてたりと、この15分間をメリハリ良く簡潔な進め方によって活用した。当該授業は、月曜日の2限に割り振られている授業で、実質的には一年生にとって週の一番初めの授業となり、新たな一週間を迎えるに際して、どのように臨んでいくかの心構えや、「7つの習慣」に対して自らの行動の変容を見直す機会として役立つ意図で利用した。結果としても、筆者らの実感として、情報デザイン入門で実施した内容の補完として上手く機能していたと考えている。

最後に利用した枠が今年度初めて実施された新入生オリエンテーション合宿の機会である。このオリエンテーション合宿とは学生部が新入生のために友人や教職員と打ち解けてコミュニケーションが図れる機会として、美浜少年の家という施設に6月22日(土)～23日(日)の一泊二日の土日に設定されたものである。本年度は試行という意味合いもあり、希望する学科や

専攻のみが参加し、それぞれの学科、専攻で独自に企画した内容を実施した。PD専攻としては「7つの習慣」の学びには、普段の授業の場とは異なる状況での機会があればと模索していたこともあり、この合宿はまたとない機会の到来となった。表-2が合宿のスケジュールである[表-2.新入生オリエンテーション合宿スケジュール]。6月22日土曜日の朝に大学に集合し、バスにて美浜少年の家へ移動。施設の利用説明を簡単に受けたのちに昼食を摂り、その午後から実質的なプログラムを実施した。プログラムは、午後の4時間と夕食、入浴後の2時間を活用した。合宿の目的である学生同士のコミュニケーションを図らせる意味も考え、学生6-7人を1グループとして活動させた。学生個々の経験や考えを教材として準備したワークシートにまとめさせて、相互に発表させ議論をおこなわせた。

合宿で実施した習慣は、「第三の習慣：一番大切なことを優先する」「第四の習慣：Win-Winの考え方」という二つの項目である。特に、「第三の習慣：一番大切なことを優先する」は、自らの行動項目の優先順位の捉え方を学ぶという、「7つの習慣」の中でも一番重要な項目である。どうしても、ゲームなどをし続けてしまいがちな学生たちに、どのような行動を優先させるべきかをしっかりと納得させて、腹に落ちる理解が必要である。このために、この学びには時間を掛けて、学生同士に発表させてディスカッションをさせる能動的な活動を促すプログラムを実施した。

表-2にあるセッションの1-2にて長い時間を掛けて「第三の習慣：一番大切なことを優先する」の学習をおこなった。まず、その意味することを教員からテキストやワークシート資料を用いて説明した。次に、ワークシートを用いて学生個人の普段の生活での時間の使い方を書かせ、その状態がどうなのかを図-3の時間管理マトリックスに記載して自らが見直し分析した。自分はどの領域に時間を使っている比率が多いのか。あるいは、第3領域の緊急ではあるが重要ではないこと、例えば友人とのたわいもない電話でのおしゃべりに時間を使っていることが多いなどを自覚させた。そののちにグループごとに個々の学生が分析した結果をディスカッションさせて、自分たちの時間の使い方の現状と問題点を抽出し、最終的にはその改善のあり方をまとめさせた。そして、セッション2の後半で各グループの発表をおこなった。この発表は非常に有意義な発表となり、予定したセッション2の時間内では収まらずに、夕食後のセッション3にても継続して実施した。

ここで得られた学生らの気づきとしては、彼らが事

表-2. 新入生オリエンテーション合宿スケジュール
<6月22日>

時刻	セッション	実施内容
13:00-14:00	1(前半)	「第1、2の習慣」の復習(30分) 「第3の習慣 一番大切なことを優先する」学習(30分) シート2-7、8の利用による説明
14:00-14:10	休憩	
14:10-15:10	1(後半)	続き「第3の習慣」シート2-9に個々の学生事に演習として記入させる
15:10-15:20	休憩	
15:20-17:00	2	続き「第3の習慣」【※グループ数は6、6-7人】 グループディスカッション(40分)：記入したシート2-9を用いて、グループ(6チーム)でディスカッション。グループごとに以下の項目をシート2-10にまとめさせる。 グループ発表(30分 5分/チーム)：発表項目「①わたしたちの時間マトリックスの現状」、「②一番時間を無駄にしていることは？」 プランナー【スケジュール管理手帳】の活用説明(30分)：シート2-11を用いた説明。
19:00-21:00	3	「第4の習慣 Win-Winの考え方」学習 説明(10分)：シート3-1を利用。演習として各自に記入させる。 グループディスカッション(30分、セッション2と同グループ)：学生相互に記入したシートを基に経験を話させる。 まとめ(40分)：各グループでのディスカッションを確認しながら、総括、7つの習慣、合宿の総括(10分)

<6月23日>

時刻	セッション	実施内容
9:00-10:30	4	「折り紙飛行機グランプリ」グループ活動【※グループ数は6、初日とは組み換え】 グループで3部門の競技に手分けして3種類を作成。 部門は、①航続距離、②滞空時間、③審美性。
10:30-12:00		3部門を審査し、表彰。各部門1-3位までを点数化し、部門賞とグループ優勝を競う。



図-5. オリエンテーション合宿復習時の授業風景



図-6. グループディスカッション風景



図-7. グループ発表風景

前に想定していた以上に意外と第3領域や第4領域の事項に時間を費やしてしまっていることが自覚された。

本人たちは、気分転換で宿題の前にゲームをやっているつもりが、主客逆転してゲームをやっている時間が主になってしまっているとの気づきがあった。特に「7つの習慣」のプログラムで強調している、第2領域の緊急ではないが重要な項目、例えばデザインをよく知るための読書、語学の勉強、あるいは資格を取るための勉強などになかなか手をつけられていない現状をしっかりと認識することができたようだった。

図-5はセッション1における復習の風景であり、図-6はセッション2のグループディスカッションの風景、そして図-7は、グループごとの発表風景である〔図-5.オリエンテーション合宿復習時の授業風景、図-6.グループディスカッション風景、図-7.グループ発表風景〕。

なお、二日目は、「7つの習慣」とは無関係なプログラムを実施したが、このプログラムの内容を参考までに紹介しておく、創造的な活動とグループでの共同作業の仕方を体得させるために、グループで競争する折り紙飛行機競技を実施した〔表-2.新入生オリエンテーション合宿スケジュール〕。このプログラムに学生達は熱中して頑張っていた。その姿は想定していた以上に、学生達の興味を上手く喚起するテーマを与えると、熱心に物事に臨んでくれるということが分かり、今後の授業の組立の参考となった。

4.2 使用教材類

「7つの習慣」に関する出版物は多様であるが、前述したように、教科書には、スティーブン・R・コヴィー氏の子息のショーン・コヴィー氏が10代向けに著作した「7つの習慣 ティーンズ」を選定した〔図-8. 7つの習慣 ティーンズ〕。ショーン・コヴィー氏は、現在フランクリン・コヴィー社にて「7つの習慣」を広める仕事に携わっているが、「ティーンズ」は氏の仕事での実践のノウハウや父親との関わりや自分の10代での学校などでの経験を踏まえた内容となっているために、実感をもって学習者にとって分かりやすい内容となっている。

また、学生用に29ページからなるワークシートを筆者は教材として作成した。図-9はそのワークシートの表紙他の全ページを並べた状態で、図-10はそのワークシートの一例で、第1の習慣の主體的な行動の重要性を学ぶためのワークシートである〔図-9.オリジナルワークシート教材、図-10.ワークシート内容例〔第一の習慣：主体的に行動する〕〕。作業内容をしっかりと理解させるために説明の仕方や記述の仕方をPD専攻の学生を対象として最適な内容にアレンジして作成を試みている。英語を語源とする用語が多く使われていることと、その概念自身が日本人にはなじみがないものに

については、PD 専攻の学生視点にあわせて、丁寧な説明に配慮をしている。

5. 「7つの習慣」実施結果

5.1 学生自己評価アンケート

プログラムを終了するに際し、効果がどのようなレベルであったかを測定する意図でアンケートを最終回である第 15 回の授業日に回収する予定で実施した。ただし、プログラムを受身的に評価させるのでは、他人事としてアンケートに回答することになってしまうので、アンケート名称を『「7つの習慣」プログラム自己評価』として、自らの実践度合いや実践した結果の到達度として自己評価させるスタイルとした。

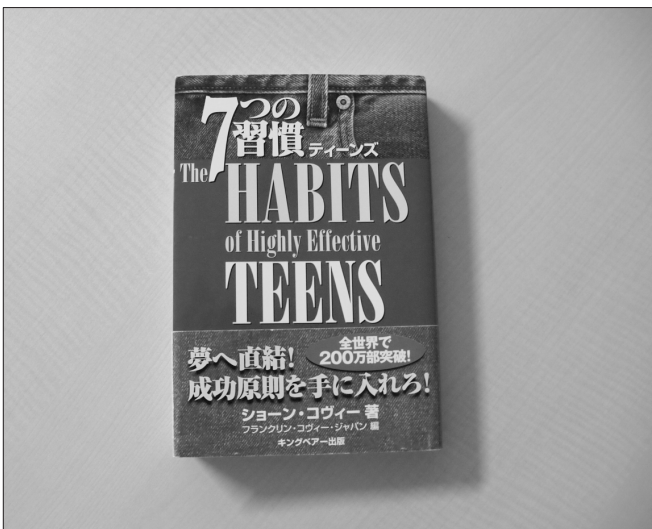


図-8. 7つの習慣 ティーンズ

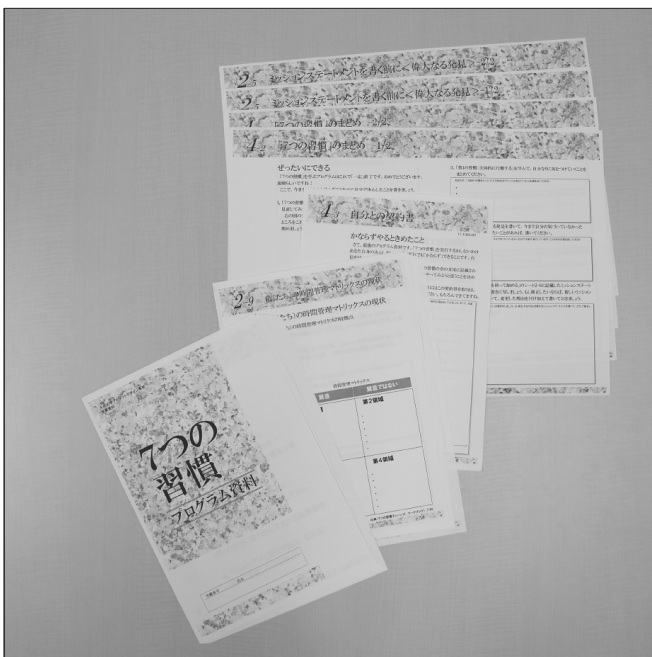


図-9.オリジナルワークシート教材

2-3
第1の習慣：主体的に行動する
T1:P.69-75

「主体的」か「反動的」か？

自らの考えで行動するのは「主体的」という言葉で表現できることは分かりやすいですが、その反対は聞かれると難しいですね。「7つの習慣」では、「反動的」という用語を使っています。

この「反動的」とは主体性を発揮せずに、出来事やそれらから受けた刺激、被った問題点などに対し、感情的な反応で応答する状態を指します。それらの反動的な行動には、論理的、倫理的、ビジョン的な判断が無く、瞬間的、感情的に反応し行動してしまっています。「反動的」の一番の問題点は、自らの行動に対して、責任を負う準備や心構えができていないで行われてしまうということです。

自分の記憶にある、「主体的」な行動の例、「反動的」行動の例、そしてそのもたらされた結果を下の、枠の中に書き出してみましょう。

あなたの実行した、「主体的」行動の例とそのもたらした結果を書き出してください

- ・行動例
- ・もたらされた結果

あなたの実行した、「反動的」行動の例とそのもたらした結果を書き出してください

- ・行動例
- ・もたらされた結果

学籍
番号

氏名

図-10.ワークシート内容例
〔第一の習慣：主体的に行動する〕

また、商品や企業サービスのレベル評価アンケートの分野で「究極の設問」と呼ばれるものがあるが、今回の自己評価アンケートにもその考え方を盛り込んでいる。それは、「あなたはこの商品〔サービス〕を友人や同僚にすすめますか？」というものである。単に満足度をたずねるのではなく、その商品やサービスが良ければ、友人や同僚に勧める可能性が高くなり、それこそが高い満足度を偽らざるに示しているという設問である。下記する設問の中で、問 6 がその質問に該当している。

以下にアンケートの実施概要と個々の質問を紹介する。なお、回答は 5 段階評価として、大変あてはまるを 5 点、まったくあてはまらないが 1 点、どちらも言えないが 3 点として回答させている。

また以下、設問は〔Q〕の略号を用いて表記する。

(1) 学生自己評価アンケート実施概要

- ・実施日時：2013 年 7 月 15 日（月）のデザイン概論の授業時に自己評価アンケート用紙を配布し、7 月 23 日（火）の第 15 回目の最終回の情報デザイン入門セミナー

一授業時に各担当教員に提出させた。

・回収数：35名 全体対象者数37名に対して、回収率94.6%

(2)「7つの習慣」プログラム自己評価設問

- Q1.「7つの習慣」プログラムの内容を十分に理解することができた
- Q2.「7つの習慣」プログラム内容に興味、関心を強く感じた
- Q3.使用した資料やテキストは分かりやすく、適切だった
- Q4.「7つの習慣」プログラムに十分にしっかりと取り組むことができた
- Q5.「7つの習慣」プログラムを学び始めてから自分の行動が変化してきた
- Q6.「7つの習慣」プログラムを友人や家族にも紹介して実行することをすすめた(てみたい)
- Q7.今回の「7つの習慣」プログラムの授業に満足している
- Q8.これからも「7つの習慣」で学んだことを実行していくつもりだ
- Q9.そのほか、良かった点、悪かった点、感想、そして今後やっていこうと思うことなどを自由に書いてください〔自由記述〕

5.2 学生自己評価アンケート結果

自己評価アンケートは設問に対して一番あてはまるを5点とし、反対にあてはまらない場合を1点として、5段階評価での回答を求めており、数値的な集計が可能な調査票の設計をしている。個々の設問に対しては、それぞれの評点のパーセンテージと平均値を算出して分析をおこなった。

5.2.1 学生自己評価アンケート結果概要

本項では結果要点を説明する。

(1)「7つの習慣」プログラムに対しては総じてポジティブな評価をしている。トップボックス〔5点の最高点評価〕は少ないものの、平均評点としては、3.8~3.9のレベルの高いものであった。

(2)もっとも高い平均評点となったのは3.9で、Q2.興味・関心、Q3.テキスト資料の適切さ、Q8.今後の実行。

反対にもっとも低かったのは、3.1でQ5.の自分の行動の変化。この理由としては、Q9.のフリーアンサーの記述にも書かれていたが、理解はしても行動変化までにはいかなかったという本音がこの数値になっているものと思われる。

(3)クロス集計では、究極の質問Q6.他者への推薦意向はやはり、Q1.理解度の高い学生がその意向も高い。理解度の回答が4と5の学生は、36%が推薦したいと回答している。

(4)質問間の相関では、あたり前の結論ではあるが、Q6.との相関度合いが高いのは、Q3とQ5。自分の行動が変化したことが、きっかけで他者へも推薦するとの気持ちになっている。

5.2.2 学生自己評価アンケート単純集計

Q1~Q8の設問について、単純な集計結果を紹介する。

Q1.「7つの習慣」プログラムの内容を十分に理解することができた〔図-11. Q1.理解度〕

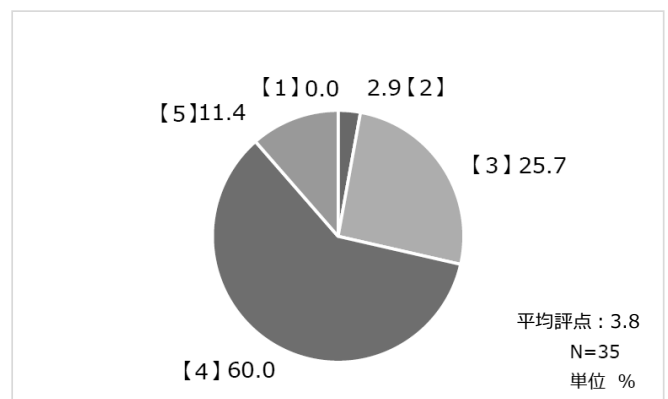


図-11. Q1.理解度

Q2.「7つの習慣」プログラム内容に興味、関心を強く感じた〔図-12. Q2.興味、関心〕

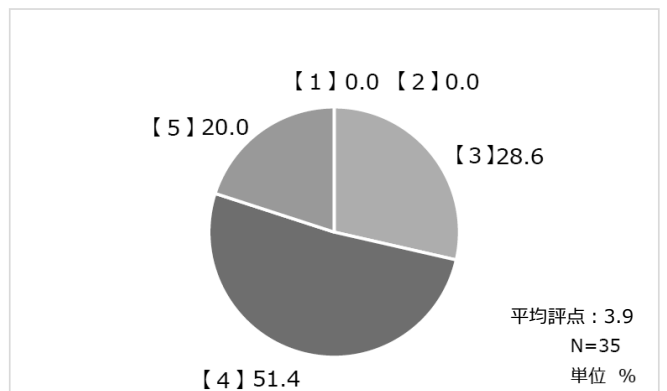


図-12. Q2.興味、関心

Q3. 使用した資料やテキストは分かりやすく、適切だった[図-13. Q2.資料、テキスト適切さ]

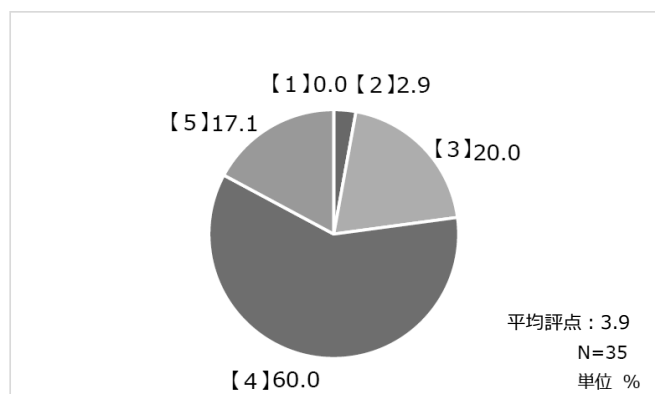


図-13. Q3.資料、テキスト適切さ

Q6. 「7つの習慣」プログラムを友人や家族にも紹介して実行することをすすめた(てみたい)

[図-16. Q6. 他人への紹介]

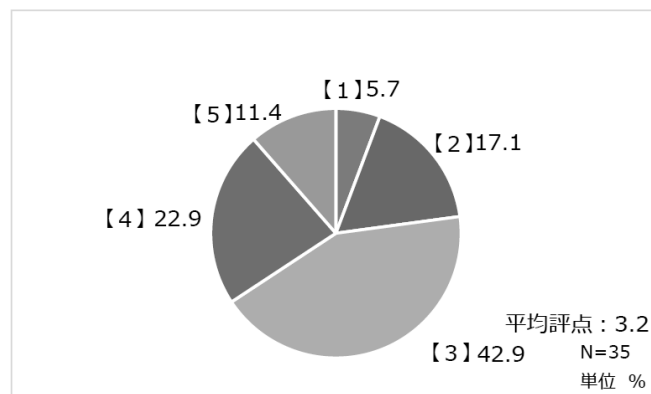


図-16. Q6. 他人への紹介

Q4. 「7つの習慣」プログラムに十分にしっかりと取り組むことができた[図-14. Q4.取り組み度合い]

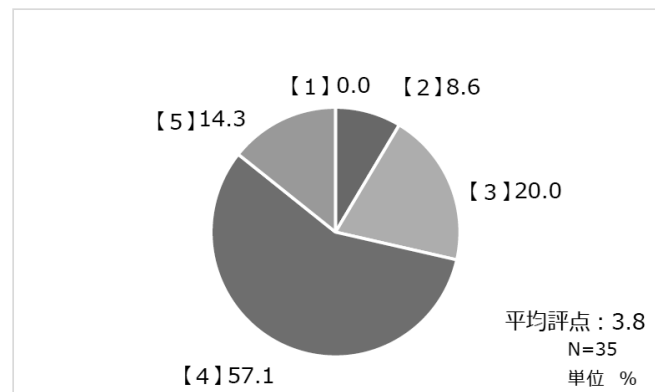


図-14. Q4.取り組み度合い

Q7. 今回の「7つの習慣」プログラムの授業に満足している [図-17. Q7. 満足度]

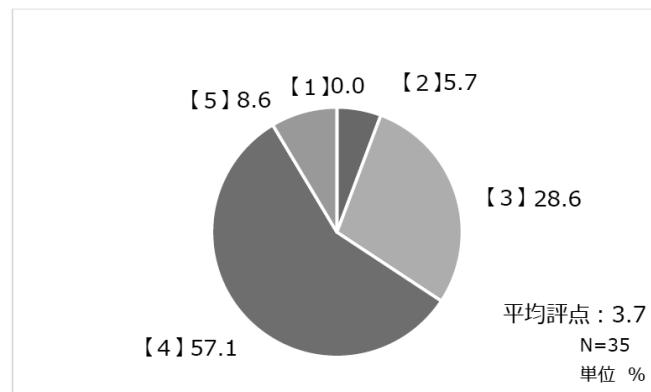


図-17. Q7. 満足度

Q5. 「7つの習慣」プログラムを学び始めてから自分の行動が変化してきた[図-15. Q5. 行動の変化]

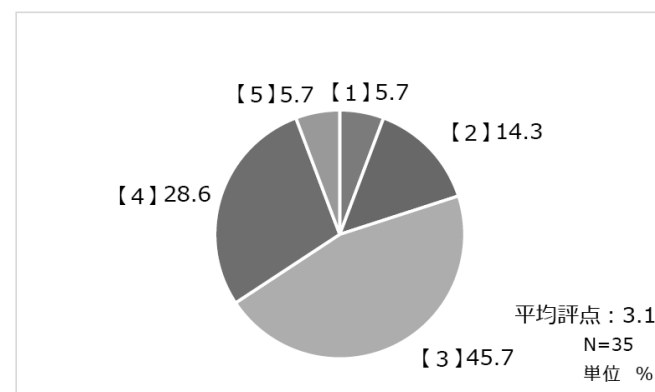


図-15. Q5. 行動の変化

Q8. これからも「7つの習慣」で学んだことを実行していくつもりだ[図-18. Q8. 今後の実行]

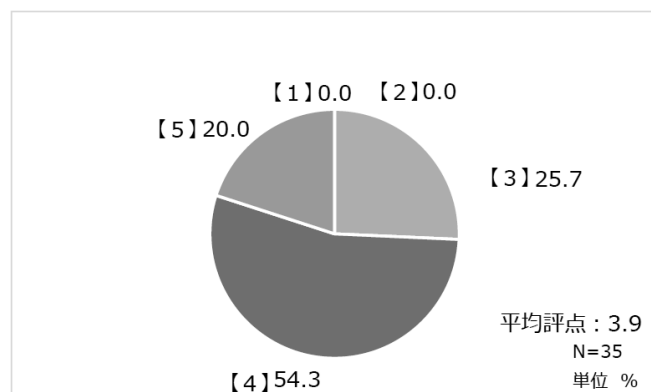


図-18. Q8. 今後の実行

5.2.3 学生自己評価アンケートクロス集計

Q1とQ6のクロス集計をおこなった。Q1にて、理解していると回答した評点4と5の回答者がQ6にて友人や家族へ推薦する意向が高いと回答している評点の4と5と回答した比率を集計した。推薦するとの回答は、36.0%。当然のことながら自らが理解すれば、他者へ推薦したいとの気持ちは高まる〔表-3. Q1×Q6 理解したので推薦する〕〔図-19. Q1×Q6 理解したので推薦する〕。

表-3. Q1×Q6 理解したので推薦する

Q1×Q6	Q1での回答が4,5でのQ6での回答が4,5 =分かっていて推薦	Q1で4,5全体人数	人数	割合(%)
	推薦しない	25	16	64.0
	推薦する		9	36.0

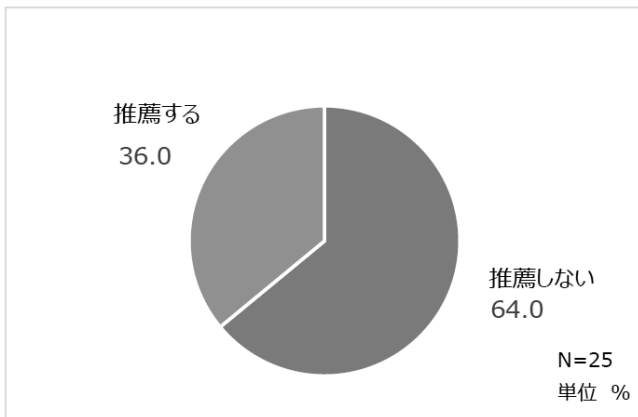


図-19. Q1×Q6 理解したので推薦する

5.2.4 学生自己評価アンケート相関分析

それぞれの設問同士の相関係数を分析した。表-4がその係数算出結果である〔表-4. 設問間相関係数〕。相関が高いと判断した閾値を0.5としたが、0.5以上の相関係数となったところに、グレーのハッチングをしている。究極の質問とされる「Q6.の推薦」との相関度合いが高いのは、Q3とQ5であった。テキストが良いと思っている人と、自分の行動が変化してきた人の高い相関関係が見て取れる。前者の関係性はテキストを良く理解した人が、結果的にこのプログラムを評価し、他者への推薦意向が高くなっているものと思われる。また、後者についても自分の行動が変化したことがきっかけで他者へも推薦するとの気持ちになったものと思われる。

表-4. 設問間相関係数

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8
Q1	1	0.581635	0.457883	0.559209	0.460065	0.258164	0.652847	0.292208
Q2		1	0.40273	0.431532	0.507526	0.221637	0.586826	0.357391
Q3			1	0.431532	0.507526	0.543182	0.528477	0.480026
Q4				1	0.622966	0.222539	0.379565	0.561769
Q5					1	0.661731	0.675553	0.651298
Q6						1	0.466705	0.468043
Q7							1	0.501471
Q8								1

5.2.5 学生自己評価アンケートフリーアンサー分析

フリーアンサーとしては、今回のプログラム全体を通じて「良かった点」「悪かった点」「感想」「今後実行して行こうと思うこと」の4点について記載して貰った。総じて記入している比率は高く、このプログラムに対してまじめに接してきている姿勢が見て取れる結果となっている。以下、それぞれの設問について記載されている内容の大まかな状況を紹介する。

(1) 良かった点

記入している回答数は32名で、記入率は、91.4%と高い。記入内容は「この授業のおかげで自分が大人になったような気がする」「生活リズムをふりかえりムダをなくすことができた」「生活習慣を改善できた」など、このような学びの機会があって良かった、そしてこの機会に改善したいとの前向きな回答が書かれていた。

(2) 悪かった点

回答数は26名で、記入している率は、74.3%と他の設問に比べて低い。回答内容は多岐にわたっているが、「実行に移すのは難しいものがあった」「意欲が湧いても実行できなかった」「面倒くさいと思うこともあった」などといった、自分が「7つの習慣」を上手く実行できていない反省点を述べているものが多かった。

また、このプログラム実施に対して不要だったとする否定的な意見は、「わざわざ学校の授業でやるようなことではないと思った」という1件のみであった。

(3) 感想

回答数は31名で、記入率は88.6%と高い。内容は多岐にわたるが、良かった点で述べた内容と類似する前向きな内容が多かった。「これから生きていく上で役に立つことが学べたと思うので良かった」「少しずつでも実行していきたいと感じた」「普段の生活がどれだけだらしなさを認識できたからよかったと思う」などの、今回の学びを起点に何かしら前向きに改善をしていこうとの意思を示しているものが多かった。

(4) 今後実行して行こうと思うこと

回答数は29名で、記入率は82.9%と高い。内容はこのプログラムの最後に自分との契約書というものをワークシートに記載させたが、その内容を実行することがこの回答として多く書かれていた。

具体的な内容は、主体的な行動をとっていく、あるいはスケジュール管理をしっかりとしていくなど、このプログラムの重要点で強調して学習して貰った点の記載が多かった。この点では実施側の意図が十分に伝

えられたものと考える。

6. まとめ

本稿では、PD 専攻の一年生に対して日々の生活を送るための基本的な姿勢、主体的な行動への姿勢が取られていない状況を改善するために、「7つの習慣」の考え方を活かしたプログラム実施の取り組みを紹介した。

結果としてはその効果は教員の実感としても、対象となる学生の自己評価アンケートからもあったと確認されるものであった。本来であれば、「7つの習慣 ティーンズ」が対象としている、高校生、あるいは中学生の時代にこういった主体的行動の基本となる生活習慣が身につくべきであるが、成人一步手前までに人格が形成されている状態でも、それを挽回することがこのように自問自答、あるいは友人たちとのディスカッション等を通じて体得することが意味を持つことが分かった。

今後も新入生に対してこのプログラムは継続していく所存であり、今回得られた細かい手法的な面での修正点を加味しながら実施いくことを考えている。

ただし、今の懸念事項としては、現一年生が折角このように主体的な行動への気づきを得たにも関わらず、日々の行動がどのようになっているかの振り返りを本人任せにしまうと、学生によってはずるずると元の生活習慣に戻ってしまう可能性も考えられる。どのように外部から個人への刺激を与えていくかが課題である。少し時間を掛けたセッションの機会を一年生の後期以降に上手く盛り込めるかどうかは今後の課題である。

参考文献

- 1) 7つの習慣—成功には原則があった! スティーブン・R・コヴィー著、ジェームス・スキナー訳 1996年12月 キングベアー出版[英文原著初版1989年]
- 2) 経済産業省社会人基礎力説明 Web サイトフリー素材 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/pr1.ppt.htm>
2013年10月13日取得
- 3) 経済産業省社会人基礎力説明 Web サイト調査・報告 www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/201006daigakuseinosya_kaijinkannohaakutoninntido.pdf
2013年10月13日取得
- 4) 7つの習慣 ティーンズ ショーン・コヴィー著
2002年5月 キングベアー出版